



連載第 111 回

新規就農をサポートする試み(その1) 美深町「R&Rおんねない」の挑戦

北海道農業の担い手不足が言われて久しい。この20年間で農家戸数は半減し、今後も減少が確実視される一方で、非農家出身者の間に「農的志向」が静かに広がる。牧場風景に憧れ、広い草地で牛を飼う酪農家の暮らしに夢をいだくものの、農地の購入や技術の習得、資金の確保などのハードルは高く、実際の就農に結びつかないことも多い。そんななか道北の美深町では、みずからの経営譲渡を決意した離農予定農家が新規参入者の受け入れ組織をつくり、成果を上げている。「R&Rおんねない」の関係者を訪ね、10年近い活動の経緯や就農した人たちの思いなどを聞いた。



▲北はるか農協の新規就農担当者(左)と話し合う「R&Rおんねない」会長の服部修さん

離農予定者が「受け皿組織」をつくり 若手就農者が地域に新風を吹き込む

経営譲渡を決意した8戸が
新規参入者の受け皿を創る

天塩川の中流域に広がる人口5000人ほどの美深町は、稲作の北限として70年代からもち米団地が形成される一方、酪農・畜産や畑作も盛んな地域である。

2003年5月、同町北部の恩根内地区で酪農経営に新規参入する人

たちのための受け皿組織「R&Rおんねない」が誕生した。みずからの経営譲渡を決意した8戸の酪農家が

新規参入者を募り、居抜きの形で牧場を継承してもらうことが目的。農家側がこうした組織を自主的に創る取り組みは、全国的にも珍しい。

それから9年の歳月が流れた。同地区では、すでに3戸の新規参入が実現し、1戸が今秋の就農をめざし

て研修に励む。会との出会いをきっかけに、町内の他地区で就農を実現させた人もいる。

北海道の牧場風景に憧れ、広い土地で牛を飼えることに魅力を感じ、酪農経営を志す非農家の出身者はけっこう多い。だが、数千万円に上る初期投資が必要なことや、自分たちの希望と受け入れ側の認識とのギャップ、研修で学んだことが経営

する手順になっている。

「最初は『新規就農者を受け入れることとで、地元の酪農家が1戸でも残れば…』という気持ちで始めたんです。新聞などで成功例が紹介され、それを見て次の人がやってきた。就農した人たちには、いろんな集まりに顔を出し、地域に溶け込んでもらうようにしています」

と、会長の服部修さん(1951年、美深町生まれ)が話す。

会の立ち上げに暗中模索 「居抜き」での継承をめざす

美深町産業施設課によると、現在の町内の農家数は220戸、半数あまりが畑作や野菜づくりを手がける。酪農家数は47戸あり、うち恩根内地区で20戸を占めている。

後継者不足は、農業関係者の悩み

のタネだった。「(会の発足前には)『このままでは過疎になるばかり。誰かに牧場を引き継いでもらえないか』関係機関はもつと力を入れるべきだ」という声がよく出ていた。でも、資金もかかる話だから、なかなか進展しない。リタイアしても周囲に新規就農者がいると、地域に人が残り、お互いが



▲新規参入者の農場で勉強会を開く会員たち(提供/美深町)

現場では通用しにくい——といった理由から、実現のハードルは高い。相談窓口の農協や自治体側の理解度や力量に左右される面もある。

「R&Rおんねない」では、新規参入をめざす夫婦を対象に全員参加の面接を行なう。合格した夫婦は、1年目には会員の牧場を回って研修を重ね、2年目は継承先でみっちり指導を受ける。そして、3年目に独立

楽になるんじゃないかと考え、10年前に検討作業を始めたんです」

と、服部さんが振り返る。新規就農者の受け入れに携わった中川町の職員や北海道農業担い手育成センターの担当者を招いて勉強会を重ね、設立準備を進めた。「牧場の継承」を考えたものの、初めは何をしていいのか暗中模索。情報発信の方法もよく分からなかった。

結局、後継者がおらず、近い将来に離農が予想される60代の酪農家を中心に8人が集まり、「R&Rおんねない」を設立した。農地面積20〜30ヘクタール台、経産牛を平均40頭ほど飼育し、健全経営を続けてきた人たちである。離農する人たちと就農希望者をつなぎ(Relay)、夢をかかなえる(実現=Realization)という思いを会の名称に込めた。

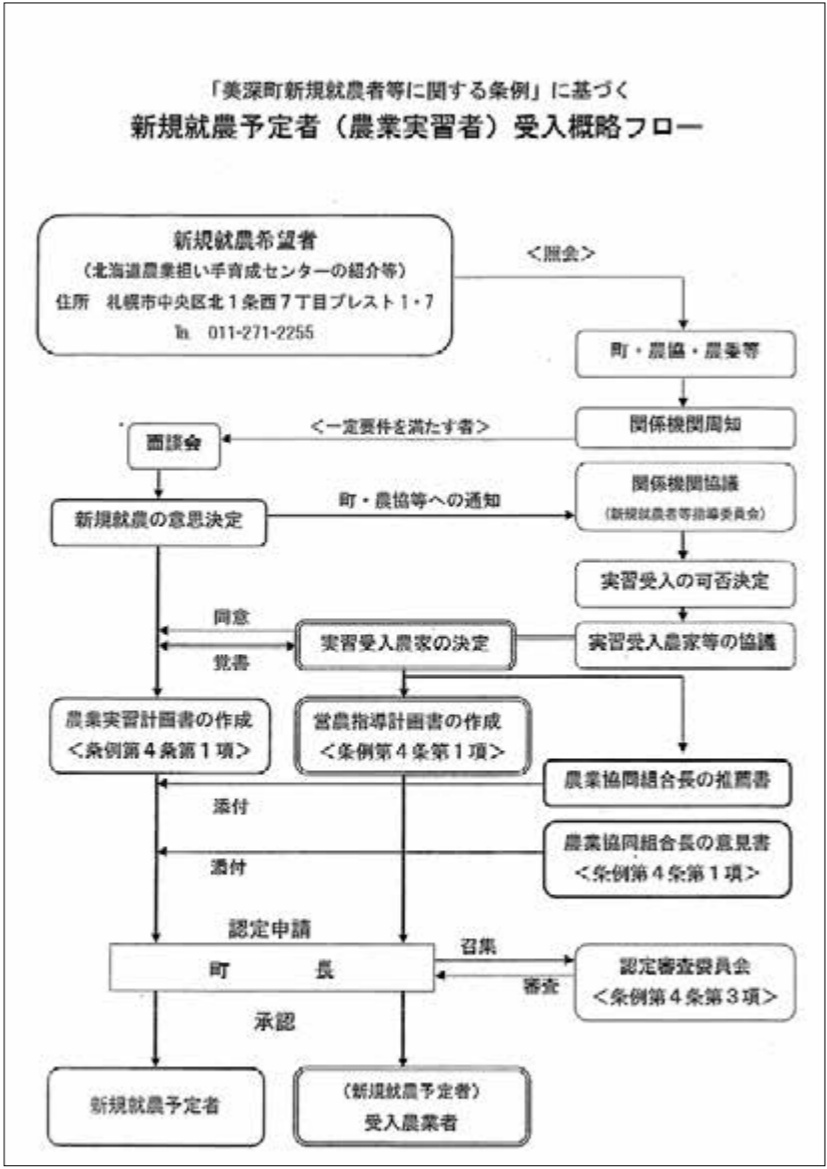
美深町では94年に新規就農者などに関する条例を制定したが、その後の10年間で酪農の新規就農はゼロ。最年少メンバーだった服部さんは、「地域に農家を残さなければ…」と考え、他の人たちに声をかけて歩き、事務局役を引き受ける。

「居抜きの継承例がなく、行政側は我々にいろんなことを求めてきた。



新規就農が実現すると案内看板を設置するようにしている。これまでに3戸が新規参入を果たした(2008年秋、近野牧場で。提供/美深町)

面接から研修、就農に至るまでの流れ(作成：美深町)



現在の会員数は9人。当初メンバーと途中入会の酪農家6人(50代後半〜70代前半)、新規就農者3人という顔ぶれになっている。就農を志す人が「この会でやっていきたい」と表明すると、地元会員の中から誰が酪農経営をやめるのか協議する。年齢順の離農にはならない。継承年度が決まると、必ず従うことを参加条件にしてきた。

酪農家は一国一城の主だから、実際にリタイアする段階になると、牧場に対する思いやエゴ、金銭面のこだわりなどが表面化することがある。「R&Rおんねない」では、そうした事態が生じないように、オープンな協議を心がけているという。「経営を渡す人も就農を希望してやってくる人も、それぞれ違う。僕らの活動は金銭面にも首を突っ込み

「全道的にも珍しい試みでしょうね。全員が保証人になるから、きちんと教えないと自分自身に降りかかってくる。だから、自然に責任を持つて話をするようになんです」

規参入者のクミカメン(注)北海道の農協が独自に創った金融システム「組合員勘定」の略称)の保証人になる。経営基盤の弱い人たちにとって、心強い援軍だ。服部さんは、

「全道的にも珍しい試みでしょうね。全員が保証人になるから、きちんと教えないと自分自身に降りかかってくる。だから、自然に責任を持つて話をするようになんです」

「R&Rおんねない」では、就農者の受け入れに始まり、農地の斡旋や技術指導、経営相談に至るまで、町や

「酪農は毎月収入が確保できるので、サラリーマン感覚でやれるという考え方もあった(満之さん)」

「子育てをするなら北海道で」という軽いノリでした(陽さん)

インターネットで調べて応募した標茶町内の牧場で、1年間の実習生活を送る。「2年やれば就農の道が開ける」との説明だった。しかし、現実には牧場の空きはなく、年齢の問題もある。確実に就農できる町を探

と、その狙いを話す。物心両面で支えあい、参入した人たちの経営を軌道に乗せるための創意工夫なのだ。

会員の牧場での研修は有益地域になじみ将来に手応え

酪農経営を引き継いだ新規就農者は、先輩たちの活動をどう受け止めているのだろうか。

古川満之さん(73年、千葉県生まれ)・陽さん(75年、東京都生まれ)夫婦は、一昨年に念願の就農を果たした。地域に溶け込み、仕事の面白さに手応えを感じている。

神奈川県内にある技術専門誌の出版社で知り合って職場結婚した二人は、30代に入ると、独立して他分野の仕事に挑戦しようと模索する。

「酪農は毎月収入が確保できるので、サラリーマン感覚でやれるという考え方もあった(満之さん)」

「子育てをするなら北海道で」という軽いノリでした(陽さん)

インターネットで調べて応募した標茶町内の牧場で、1年間の実習生活を送る。「2年やれば就農の道が開ける」との説明だった。しかし、現実には牧場の空きはなく、年齢の問題もある。確実に就農できる町を探

ロコミや新聞記事で知った人たちが就農の夢を実現へ

設立総会の前に、道農業担い手育成センターの首都圏窓口(東京)で美深町のことを知った、千葉県出身の亀田健太郎さん(65年生まれ)とのつながりができた。中学時代から酪農の仕事に憧れ、帯広畜産大を卒業後は酪農ヘルパーや牧場勤務の経験もある亀田さん。受け入れが決まり、研修期間をへて05年、妻の寛子さん(74年生まれ)とともに、晴れて「新規就農第1号」に認定された。

中標津町でマイペース酪農を

実践する三友牧場(09年6〜7月号の対談記事を参照)で実習中だった大阪府出身の塩崎智史さん(80年生まれ)・理恵さん(78年生まれ)夫婦は、新聞記事で同会の活動を知った。04年、中標津から車で6時間かけて来町し、30分間の面接を受け、すぐにとんぼ返り。2回目の訪問時に全員

「居抜きでの就農」のニュースが新規参入を志す人たちを引き寄せた。

全員参加の「面接」を重視し2年間の研修後に独立する

「R&Rおんねない」では、就農者の受け入れに始まり、農地の斡旋や技術指導、経営相談に至るまで、町や

「居抜きでの就農」のニュースが新規参入を志す人たちを引き寄せた。

全員参加の「面接」を重視し2年間の研修後に独立する

「R&Rおんねない」では、就農者の受け入れに始まり、農地の斡旋や技術指導、経営相談に至るまで、町や



会長の服部さんは「人と人をつ結びつけるのは難しい仕事」と話す。約100頭の乳牛を飼い、そう遠くない将来、リタイアして新規参入者に経営を継承する

「人と人をつ結びつけるのは難しい仕事」と話す。約100頭の乳牛を飼い、そう遠くない将来、リタイアして新規参入者に経営を継承する

「人と人をつ結びつけるのは難しい仕事」と話す。約100頭の乳牛を飼い、そう遠くない将来、リタイアして新規参入者に経営を継承する

「いろんな農家の目線で意見を聞けることがうれしい。それを、うまく生かしたいですね(篤子さん)」
就農予定地の農地面積は約38ヘクタール。

「面接時に就農先の牧場が示され、農地価格なども教えてもらったので、僕たちの考えが実現可能なのか具体的に検討できました。(古川さんら)」
の(実例が身近にあるのがいい。今は就農を待ちきれず、ウキウキ感が強いんですよ(幸造さん))
「いろんな農家の目線で意見を聞けることがうれしい。それを、うまく生かしたいですね(篤子さん)」
就農予定地の農地面積は約38ヘクタール。

従業員を募集していることを知り、夫婦で1年ほど働いた。だが、自分たちが求める酪農の姿とは違うと感じ、別なところでの就農をめざす。
道内各地の自治体に電話をかけまくった。道農業担い手育成センターの担当者から「R&Rおんねない」の話を聞き、1週間後の面接に臨む。「美深で就農するなら、3日以内に連絡を」と言われ、二人で相談して「行きます」と伝えた。一昨年1月に転居し、研修を重ねてきた。



大学で動物行動学を勉強し、研修中の中村さん夫婦。今秋、念願の就農が実現する予定になっている

タール。二人は「経産牛40頭十育成牛」のコンパクトな規模を維持しつつ、動物福祉にも適う牧場づくりをめざす。20代後半の若さを發揮し、夢を実現してほしいものだ。

畑作版の受け皿組織が誕生 町・農協も新規参入を支援

ここ10年間ほど北海道内での新規就農者数は、毎年600から700人程度で推移している。農家出身者による「新規学卒就農者」と「Uター

ン就農者」が圧倒的に多く、全体の9割強を占める。2010年の非農家出身の「新規参入者」は61人にどどまり、このうち酪農経営を選択したのは19人。06年〜10年のデータを見ても、20人前後で推移してきた(道農政部農業経営課まとめ)。
酪農をめざす本州出身の若者は多いものの、先行投資が多額なこともあり、ハードルは高い。就農先で良き先輩農家や仲間にも恵まれるかどうか、経営の行方を左右する。
「R&Rおんねない」では、新規参入者がスムーズに営農を始めるための条件を整える一方、リタイアする酪農家には「教え、伝えることの楽しさ」を創出しつつ、離農後の生活保障にもつなげてきた。
こうした継承システムが成果を上げていくことに触発され、町内では新たな試みが始まっている。
4月中旬、畑作バージョンの新規就農者受け入れ組織「農の彩北おんねない」(山形重隆会長)が誕生した。居抜きでの継承にこだわらず、就農希望者や研修生を積極的に受け入れることで、地域の畑作を継続・発展させる活動に取り組んでいく。さらに、恩根内地域に隣接する西里・紋

穂内地区でも、営農集団のなかに新規就農者の受け入れ部会を設ける動きが具体化してきた。
町は今年度、就農希望者や実習生の住宅不足を解消するために宿舎を建設する。「12畳の個室5つと談話室を整備し、来年オープン」の予定です。隣の町農業振興センターとの一体管理で、町の基幹産業を活性化させた「(産業施設課)といい、積極的に支援していく」。
「R&Rおんねない」の窓口になってきた北はるか農協では、今春から新規就農の担当者を増員して2人体制にした。畑作版も誕生したので分担して情報を共有し、スムーズに農業経営を継承する流れを加速させた(営農課)と意欲を見せる。
後継者難による地域の衰退に歯止めをかけようと酪農家みずから立ち上がった10年。若手就農組が地域に新風を吹き込み、農業・農村の再生に向けた機運が少しずつ広がる。
【R&Rおんねない】
問い合わせ先/美深町大通北2丁目北はるか農協本所営農販売部
☎01656・2・1601(代)
<http://www.ja-kitaharuka.or.jp/recruitment/>



新旧酪農家と会員らが一堂に会し、牧場の継承式を行なう(提供/美深町)

すようになった。
08年秋、前出の近野さんを紹介した『日本農業新聞』の記事を目にする。すぐに連絡して「R&Rおんねない」の面接を受け、美深町での研修が決まった。
「いろんな農家のやり方を直接見て、学ぶものが多かった。研修期間中に継承先の牧場を知ることができ、有利でした。どんな質問にも答えてくれる人ばかりで、お節介なくらい教えてもらった。近くに畑作農家もあって、機械の使い方を聞いたりして新鮮でした」
と、満之さんが笑顔で振り返る。

道農業開発公社の「農場リース事業」を活用して農地(約30ヘクタール)を取得し、牛と機械は制度資金を借りて購入した。現在は乳牛48頭(うち経産牛は32頭)を飼う。
古川さん夫婦にはゼロ歳から6歳まで男の子が3人いる。下の二人は美深で生まれ、近所の人たちが「久しぶりの赤ん坊だね」と我が事のように喜んでくれた。北海道弃も覚え、一家は美深の人たちに愛されている存在のようだ。
子育てのかたわら、牛舎での作業や牧草の収穫などをこなしてきた陽さんは、「たまに東京の都心が恋しくなるけれど、スキューもできるし、わたしは美深の生活が好きですね」と、田舎暮らしを楽しんでいる。

満之さんには、電子部品メーカーの技術者として8年間、金型の設計に携わった経験もある。現場の作業方法を改善していく面白さを体感し



脱サラして神奈川県から移り住み、2年前に就農した古川さん夫婦。最近、3人目の息子が誕生した

たが、それは乳牛や牧草地、機械などの経営管理をするのと共通点がある、と受け止めてきた。
新規参入を志す人々には、「遊び半分ではやらないほうがいい。頭でっかちの考えでは周囲とぶつかります。『一から学んだ』という気

持ちでスタートすると、うまくいくんじゃないかな(満之さん)とアドバイスする。
動物福祉に適う牧場めざし
研修に励む中村さん夫婦
古川さんに続く参入予定者もいる。天塩川や国道40号にほど近い牧場で、今秋の就農スタートをめざす中村幸造さん(84年、山梨県生まれ)・篤子さん(86年、埼玉県生まれ)夫婦。数年前に農場主が健康上の理由で離農したため、居抜きでの継承にはならないが、会員の牧場に通い、研修に励む日々が続いている。
大学教員や歯科医の家庭に育った二人は、神奈川県内にある麻布大学獣医学部で動物行動学を学んだ。酪農経営を志すまでの経緯などについて、幸造さんがこう話す。
「肉や卵など食べものに興味があり、畜産系に進んで豚の動物福祉(アニマル・ウェルフェア)を専攻しました。ドクターコースに進むかどうか悩んだけれど、(就農して)現場で実践する道を選んだ。今は、牛たちの行動の自由を保証しつつ、畜産と両立できないか、と考えています」
卒業後、浜中町の大規模な牧場で